

ちひろ美術館・東京

美術館だより

No.182

2013.8.7



ちひろ・絵本づくりの現場

●2013年8月7日(水)～10月27日(日)

さざなみのような画風の流行に左右されず、何年も読みつづけられる絵本を、せつにかきたいと思う。もっとも個性的であることが、もっとも本当のものであるといわれるように、わたしは、すべて自分で考えたような絵本をつくりたいと思う。

いわさきちひろ 1964年

いわさきちひろは、生涯にわたって絵本表現の可能性を追求し続けた画家でした。より多くの人に絵を見てもらいたいと、印刷美術での仕事を選んだちひろにとって、理解ある出版社や編集者との出会いは、絵本を舞台にしての新たな画境を開くきっかけともなりました。

本展では、絵本の原画、習作やスケッチ、ダミーなどの展示とともに、制作の現場を知る編集者の証言を紹介し、絵本づくりにかけたちひろの思いに迫ります。

物語絵本

1960年代半ばから、第2次ベビーブームの到来を前に絵本を扱う出版社が増え、意欲的な画家が絵本の書き手として登場するようになります。童画家として評価を得ていたちひろのもとには、各出版社から絵本の仕事の依頼が集中します。

1965年、偕成社は初の本格的な絵本シリーズ「ひろすけ絵本」(浜田廣介・文)の刊行にあたり、『りゅうのめのなみだ』(図1)の画家にちひろを起用します。ちひろにとって初めての物語絵本の仕事であり、これを機に、アンデルセン童話や日本の昔話など数多くの物語絵本を手がけるようになります。



「あかいくつ」(偕成社) 1968年

1968年までに偕成社から5冊の絵本を出したちひろは、編集者から次は『りゅうのめのなみだ』や『うらしまたろう』とは違う、ちひろさんらしい絵本を」といわれて、希望したのがフランス映画「赤い風船」*の絵本化でした。その2年前にヨーロッパ旅行でパリを訪れたちひろは、単なる文章の説明ではなく、物語の持つ雰囲気や叙情を描き出すことに心を砕き、古いアパートマンやモンマルトルの石階段など心に刻んだパリの街の風景を、『あかいふうせん』の描写に生かしています(図2)。

*1956年フランス映画 監督・脚本：アルベール・ラモリス



ちひろが撮影したパリのアパートマン 1966年

若い人の絵本

1966年、ちひろはアンデルセンの『絵のない絵本』(図3)を童心社から出版します。前述のヨーロッパ旅行もこの企画の取材をかねたもので、ちひろは100点余りのスケッチ(図4)を残しています。貧しい画家に毎夜、月が見てきた人生の悲喜こもごもを語って聞かせる三十三夜の物語は、子どもよりもむしろ大人のために書かれた文学作品でした。それまで幼児絵本専門だった童心社は、若い人を対象にしたモノトーンの絵本という新たな企画で、ちひろの要望に応えます。編集者の渡辺泰子は「若い人向けのきれいな絵本でいこうと提案した。彼女のモノクロームはカラーの絵よりずっと大人っぽい。その上無限の色彩を感じさせる豊かさ、みずみずしさがある。」と、その魅力を語っています。『絵のない絵本』の成功によって「若い人の絵本」はシリーズ化し、ちひろは毎年のように自身が選んだ文学を絵本に描いていきました。鉛筆の線と墨の微妙な濃淡を駆使して、文学の世界を情感豊かに描き出した同シリーズは、童画家の枠を超えて、画家としての表現の深まりを感じさせます。



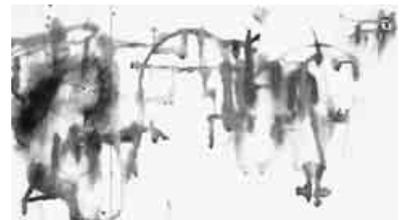
「万葉のうた」(童心社) 1970年

感じる絵本

1968年、ちひろは至光社の編集者・武市八十雄と組んで、『あめのひのおるすばん』に取り組みます。武市は、海外で絵本のあり方を真剣に模索する絵本制作者の仕事に触れ、帰国後それまでの主流とされた物語絵本とは別のまったく新しい絵本づくりを目指します。武市が念頭に置いた画家が、いわさきちひろでした。ちひろもまた、人気作家として精力的に仕事をこなしながらも、器用にまとまってしまう自分の画風に疑問を抱き始

めた時期で、「新しい、生きいきとした仕事がほんとうにしたい」(1968年)と、意欲的に臨んでいきます。ふたりは目指す方向を「感じる絵本」と称し、「説明的な描写を避け、感じさせることに集中する」「引き算のつもりで、一番大事なもののみに集中する」ことを意識して絵本制作にあたりました。『あめのひのおるすばん』は、雨の日に初めてひとりでお留守番をする女の子の、微妙な心の変化を描いたもので、水彩の潤んだあいまいな画面が余情を醸し出しています(図6・7)。

武市は「印刷物として子どもが手にする絵本を、版画と同じように、商品ではなく、一冊一冊が第二芸術といえるような質をもった作品」であると考へ、製版・印刷にも最高の質を求めました。印刷されたものが最終的な作品だとする姿勢は、合成やコラージュなど印刷技術を利用した新たな表現をも生み出しました。



「あめのひのおるすばん」(至光社) 1968年
絵本では、図6に別の背景の画面を合成している

平和の絵本

1972年5月、ちひろは画家仲間で作る「童画ぐるーぷ車」の展覧会に、「こども」と題した3枚の絵を出品します。ベトナム戦争への抗議と平和への願いを込めて、戦火のなかの子どもの姿を描いたこの作品が、岩崎書店の編集者・小西正保の目にとまり、『戦火のなかの子どもたち』の企画が生まれます。ちひろは病をおして制作に取り組み、1年半を費やして習作を含む50点もの作品を描き上げました。「焰のなかの母と子」(図10)は、校正の試し刷りが出た後に、ちひろの強い希望で最後に描き足された作品で、出版社が印刷直前の修正に応じることは異例のことでした。母親の怒りの表情は、戦争を起こすものに対してのちひろ自身の憤りと重なります。平和への思いをこめた渾身の一冊が、生前に完成させた最後の絵本となりました。

ちひろは生涯に40冊もの絵本を残し、それぞれの出版社の持ち味を生かした絵本制作は、ちひろの画風をより多様で豊かなものへと導いていきました。多くの絵本は今も版を重ね、世代や国境を越えて読み継がれています。(山田実徳)



図1 りゅうに乗る男の子
『りゅうのめのなみだ』(偕成社)より 1965年



図2 バスカルのアパートと風船 『あかいふうせん』(偕成社)より 1968年



図3 煙突掃除の少年 『絵のない絵本』(童心社)より 1966年



図4 ロンドン 木立の向こうのレンガ造りの家 1966年



図5 腰かける少女 1968年
上製本より先に出版された月刊誌『こどものせかい』版の表紙は、大胆にもにじんだ青の背景に白抜きのシルエットだけが描かれ、少女の不安な気持ちを暗示しています。

図6 窓ガラスに絵をかく少女
『あめのひのおるすばん』(至光社)より 1968年

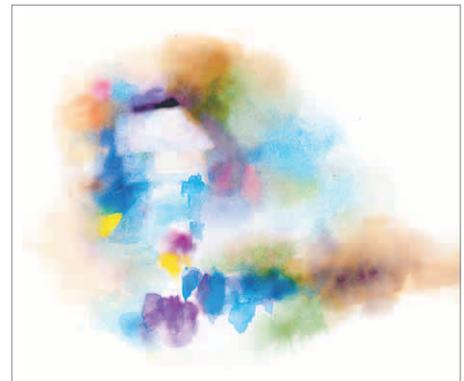


図7 雨にけむる白い家
『あめのひのおるすばん』(至光社)より 1968年



図8 手に包帯をしたひさ
『ひさの星』(岩崎書店)より 1972年



図9 増水した川と泣く男の子
『ひさの星』(岩崎書店)より 1972年



図10 焔のなかの母と子
『戦火のなかの子どもたち』(岩崎書店)より 1973年

〈企画展〉 ずっと長さんとともに —長新太が描いた子どもの本—

後援：絵本学会、こどもの本WAVE、(公社) 全国学校図書館協議会、(一社) 日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、(社) 日本図書館協会、杉並区教育委員会、中野区、西東京市教育委員会、練馬区、武蔵野市教育委員会
協力：あかね書房、絵本館、偕成社、金の星社、クレヨンハウス、講談社、国土社、小峰書店、鈴木出版、童心社、徳間書店、のら書店、福音館書店、文溪堂、文研出版、理論社

●2013年8月7日(水)～10月27日(日)

惜しくも2005年に亡くなった長新太は、40年以上にわたり、漫画家、イラストレーター、絵本画家としてさまざまな作品に取り組みました。手がけた書籍は実に400冊を越えています。なかでも、児童文学や絵本の分野で大きな足跡を遺しました。本展では、約100点の原画を展示し、子どもの本を舞台に繰り広げられた個性豊かな11人の作家とのコラボレーションと、長新太独自のユーモアに満ちたナンセンスの世界を紹介します。

1949年に漫画家としてデビューした長は、四コマ漫画や風刺漫画を描く一方、翌年から子どもの本の挿絵を手がけています。本格的に子どもの本を舞台に活躍を始めたのは、1958年に堀内誠一の紹介で絵本を手がけてからのことです。^{*1}敗戦から十数年が経ち、急速な勢いで復興が進む当時の日本では、次の時代を担う子どもたちを育むために、作家、画家、編集者とさまざまな才能が集まり、子どもの本は興隆期を迎えていました。

時代を超えて読み継がれる作品

青春時代のひとこまをいきいきと描写した今江祥智の『山のむこうは青い海だった』は1960年に出版されてから現在まで50年以上にわたり愛されている作品です。長は新聞連載時からこの物語の挿絵に取り組みました。アメリカのジェームズ・サーバーなどの海外の漫画を研究して体得した鋭い線による表現は、時代を経てもなお、物語とともに新鮮さを失っていません。今江は、テキストを生かす長の絵を「演出家にも通じる仕事」と評しています。^{*2}以後、長は晩年まで、今江と子どもの本をつくり続け、最も多くの共作を残しました。本展では、今江の作品集にも収録されていない童話「おやすみはくらのむぎわらぼうし」(図1)の原画も初公開します。

庄野英二の『星の牧場』(図2)も、長く読み継がれている児童文学作品のひとつです。物語に絵を割り付け、子どもたちに愛される本に仕上げるために、編集者らが果たした役割もまた大きなものでした。庄野は『星の牧場』が完成し、送られてきたときのことを次のように回想しています。「送られてきた小包を開いたとき、私は思わず驚嘆の声を発しないではいられなかった。わが国有史以来の超大型豪華本であった。それまでは岩波書店の児童書が造本を誇っていたが、それをはるかに凌駕するものであった。装幀、挿画は長新太であった。」^{*3}

子どもの心に寄り添って

1960年代以降、大人からの教条的な押し付けではなく、底抜けに面白く、子どもが自分の姿と重ねられるような児童文学作品が生まれました。筒井敬介は、『げらっくすノート』(図3)など、子どもの日常生活を背景にしたナンセンス・ストーリーで長と組んでいます。長は漫画で培ったシンプルな線描で、最もユーモラスな場面をとらえ、子どもたちを物語の世界に引き寄せます。

灰谷健次郎が子どもの心に寄り添って書いた数々の物語も、長新太の絵とともに今日まで多くの子どもたちに親しまれてきました。子どもが描く絵にも通じるあたたかく素朴な筆致で描かれた絵は、灰谷のやわらかなことばとともに、子どもたちの心のなかに等身大の友だちのイメージを広げています(図4)。当時の本づくりに関わった編集者は、長に絵を依頼すると、期日までにサイズや色の指定、見返しや背カットなどすべてが完璧な状態で仕上がってくること、そして物語を深くとらえ、予想を超える作品に仕上げられることに驚いたといえます。^{*4}そこには、子どもの感受性に敬意を払い、応えようとする長の真摯な態度が貫かれていたのでしょう。

スケールの大きな風景

子ども時代を樺太で過ごした神沢利子の『いたずらラッコとおなべのほし』(図5)や、瀬戸内海の能美島で少年時代を過ごした山下明生の『しっぽなしさん』や『うみぼうやとかぜばんば』など、作家の幼少期の体験をもとに大自然を舞台にした物語にも、長は絵を描いています。こうした物語を手がけたことが、そ



「うみぼうやとかぜばんば」(山下明生・文 のら書店)より
1994年

の後、長の絵本にスケールの大きな風景が現れるきっかけのひとつになっているのかもしれない。神沢は、長が時を隔てて描いた自作の童話について次のように記しています。

「イラストの時の線の美しさに代って、絵本は夕焼や青い海と共に、大自然の中に生きるラッコを描いて、長さん独特のたのしさに溢れるもので、とてもうれしくなりました。」^{*5}

絵本の仕事

1970年頃から、長は童話や児童文学の絵だけではなく、絵本を多く手がけるようになります。『えをかく』や『にゆるべろりん』(図7)などの絵本をともにつくった谷川俊太郎は長新太の絵本の特徴を次のように述べています。「長さんの絵は視覚だけでは足りなくて、触覚、聴覚、味覚にまで訴えてきます。そういう未分化な感覚は幼児のものだけど、大人はそれをふだんは抑圧してるね。(中略)自分の意識下を堂々と表に出せるのが絵本のいいところだとぼくは思っているんですが。」^{*6}

長新太自作の童話や絵本

長は絵童話『つみつみニャー』(図8)を始めとして、絵もことばも自身で手がけた作品で独自のナンセンスの世界を先鋭化させていきます。もともと漫画を描いていた長にとって、ストーリーも絵も自身で手がけることには抵抗がなかったといえます。^{*7}長は絵とことばの関係をしばしば、まんじゅうの皮とあんこにたとえています。「まんじゅうの皮だけ食べるとうまい—あんこだけ食べるとうまい—しかし、いっしょに食べるとうまい—これではまんじゅうとして落第でしょう。」^{*8}まんじゅうをギューッと押すと「ムニユッてあんこが出てくる。そのムニユッがかくもとなんだ。」^{*9}とも。

ナンセンス絵本のひろがり

1980年代以降、長のナンセンスの世界は、他の詩人や児童文学者と共有され、日本の絵本に豊かな土壌が耕されていきます。内田麟太郎、工藤直子、中川ひろたか、八木田宜子らのことばや物語は、長新太が描く地平線や水平線がどこまでも広がるスケールの大きな空間を舞台に、生理的な快さをもたらし鮮やかな色彩やたっぷりとした筆致と溶け合い、長独自のユーモアあふれるナンセンスとそれぞれの作家の個性が響き合う数々の絵本が生まれました。1985年の『さかさまライオン』(図9)で初めて長新太と一緒に絵本をつくった内田麟太郎は、本展に合わせて以下のことばを寄せています。

「まさか絵本の仕事をするとはいってもしなかった。そもそも『さかさまライオン』の原作は童話だったのだから。それが長さんとの出会いで絵本になったばかりか、『内田さん、絵本には絵本のことばがあります』と一番大切なことを教わった。そう、一番大切なことを。」

(原島恵)



図1 「おやすみぼくのむぎわらぼうし」
(今江祥智・文 鈴木出版) より 1973年



図2 『星の牧場』
(庄野英二・文 理論社) より
1963年

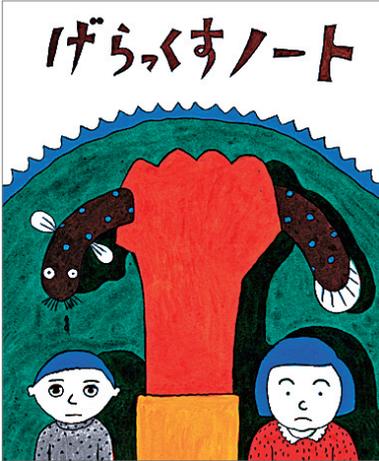


図3 『げらっくすノート』
(筒井敬介・文 偕成社) より 1973年



図4 『ろくべえまってるよ』
(灰谷健次郎・文 文研出版) より
1975年

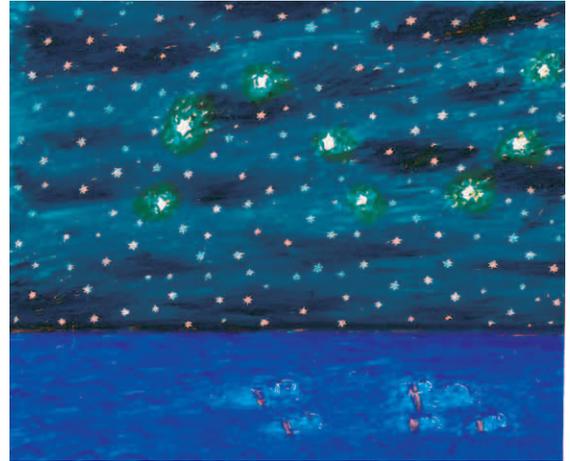


図5 『いたすらラッコとおなべのほし』
(神沢利子・文 あかね書房) より 1973年



図6 『ぼくのくれよん』(長新太・文 講談社) より 1973年



図7 『にゆるべろりん』(谷川俊太郎・文 クレヨンハウス) より 2003年



図8 『つみつみニャー』
(長新太・文 あかね書房) より 1974年

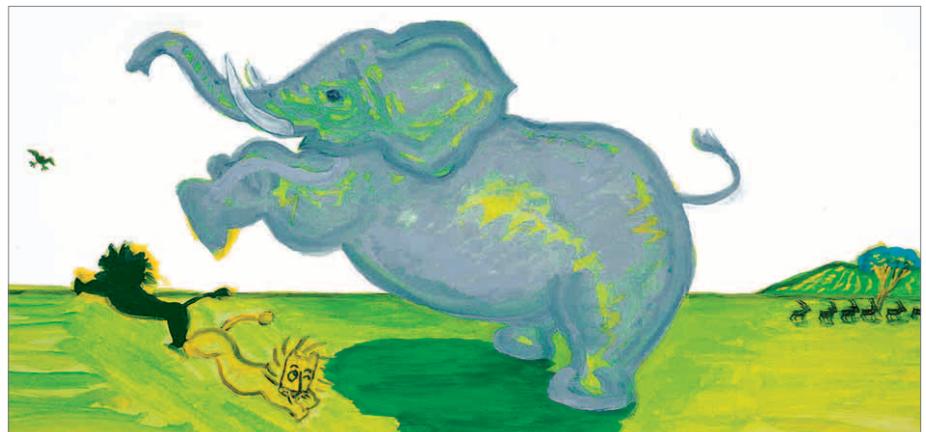


図9 『さかさまライオン』(内田麟太郎・文 童心社) より 1985年

* 1 : 1950年に子ども向けの本『新聞ができるまで』(小峰書店)の絵を描く。文は後年ともに絵本をつくった寺村輝夫(竹田真夫の筆名)。1958年に月刊絵本こどものとも『がんばれさるのさらんくん』(中川正文・文 福音館書店)で初めて絵本を手がけた。
* 2 : 長新太、松居直、工藤直子「座談会絵本とのかかわり、そしてこれから」『飛ぶ教室』51号(光村図書出版株式会社)1994年より
* 3 : 庄野英二『鶏冠詩人伝』(創元社)1990年より
* 4 : 磯野誠子氏、恵良恭子氏(のら書店)より聞き取り

* 5 : 本展に合わせて寄せられたことば
* 6 : 『谷川俊太郎と絵本の仲間たち 一堀内誠一・長新太・和田誠』展(2011年10月26日~2012年1月29日 ちひろ美術館・東京)に寄せたことばより
* 7 : 多田ヒロシ、長新太、馬場のぼる、前川かずお「座談会：面白くて楽しいことが感動だ!」『季刊絵本』第5号(すばる書房)1983年より
* 8 : 『あとがき』『つみつみニャー』(あかね書房)1974年より
* 9 : * 2に同じ

「手から手へ展－絵本作家から子どもたちへ 3.11後のメッセージ－」関連イベント報告

ちひろ美術館開館以来、最も多い110人もの出品作家数となった「手から手へ展－絵本作家から子どもたちへ 3.11後のメッセージ－」。会期中には絵本作家の方々が毎週のように訪れ、さまざまな催しが行われました。

初日の5月22日にはオープニング・レセプションが開催され、32名の出品作家のほか、出版社や絵本関連団体の方など120名近い関係者が集まりました。手から手へ展の最初の呼びかけ人であり、実行委員会代表の降矢奈々さんもスロバキアから駆けつけ、「絵だけでなく、みんなの力が全部、手から手へ展なんだと思っています。でもこれははじまりです。まだ事態はなにもよくなっていない。展示がオープンしたことをよろこぶと同時に、みんなで気を引き締める日にしたいと思います」と、あいさつしました。



5月22日には手から手へ展の中心で活動をされてきた広松由希子さんが聞き手にたって、降矢奈々さんの講演会「手から手へ展のはじまりとこれまで。そして、これから。」が開催されました。ヨーロッパ5カ国での巡回展の報告のほか、日本での展覧会が開催されるまでの経緯、現在ますます広がっている手から手への活動についてもお話しくさしました。

6月8日には「手から手へフォーラム」が開催されました。パネリストは降矢奈々さんと、東北の被災地に出かけてワークショップを行ってきた荒井良二さん、原発事故直後から「NO! 原発展」の中心として活動してきた市居みかさん、そして福島で復興活動を積極的に行っている遠藤ヒロ子さん。1時間半にわたるフォーラムの内容の一部をご紹介します。



降矢 3.11以後、これから先絵本ができることはなんだろうということを考え続けているのですが、ここでみなさんと話すことで、少しでもヒントをつかむことができたと思います。まず荒井さんの出品作はな

んで「ニュー原始くん」なんですか。

荒井 福島の原発の爆発後、どこかに子どもどらなければ、未来なんてとうていやってこないと思ったわけです。原始にもどるというのは極端ないい方ですけど、それくらい極端にいわないとこの国は変わらないのかなって。

降矢 ヨーロッパ展の最初からのメンバーである市居さんは？

市居 「さわったよ」は、自然のなかで子どもと虫をさわっている絵なんです。楽しかった子ども時代に戻りたいという思いがあるから、私は絵本を描いているように思います。原発事故は、人間にとってそんな宝物のようなときを奪ってしまうもの。絵本をつくっているものとしては許せないという思いがあります。

降矢 私の「内部被曝」は、原発から漏れ出ている放射性物質が魚のほうにたまっていき、またそれが子どもに降り注いでいくような絵です。絵を見た人に、今の現実を直視してほしいという思いを込めました。

遠藤 正直にいうと、この展覧会は全般的に、すごく重く、苦しい。放射能っていうものに、私自身ストレスがあるからかもしれないですね。だからこそ、こういう絵は日本中みんなに知ってもらいたい、そこらじゅうで叫んでもらいたいと思いました。

降矢 遠藤さんがみていらっしゃる福島の子供たちは、どんなようすなのでしょう。

遠藤 子どもが外にいないですよ。私の家の前は公園なんですけど、そこは立ち入り禁止です。子どもって土や石ころをいじってみたり、川に入ってみたりするものだと思うんですけど、さわってはいけないと、頭に入っていて。そういうのは子どもの社会じゃないという気がします。福島から出ようにも、経済的に移動できない、家族がいっぱいいて動けないと、みなそれぞれの事情があります。

荒井 「絵本になにができるのか」ということでは、ことばにしようとする前に、なにか行動をすべきだって気がするんですよ。なにか性急に答えを出すというよりは、行動を起こしながら、命題をいつも考え続けるのが好ましいと思うのだけど。つくり手というのは、やっぱり徹頭徹尾アーティストとしてこだわって、おれはこう思うというつくり方をするものだと思う。それで反感をもたれたりするのかもしれないけど、世の中になにかを発表するということは、必ずしも全員が賛同してくれるものじゃないし。

遠藤 読み手がどんなふうにとっても、つくり手がどんな思いでつくっているかが大

事だと思うんですね。絵本は子どもだけが読むものじゃない。年齢が上がるほど、その絵本をみたときに自分の経験が関わると思うんです。評論ではいろんなことがいわれるけれど、本との出会いは人それぞれなので、本をつくる人には自由にかいてもらえればと思います。

荒井 マーガレット・ワイズ・ブラウンが「子どもの本をつくるということは人間のためにつくることなんだ」と書いていて、これをいい切れるってかっこいいと思う。ぼくはこれを肝に銘じています。

市居 3.11後、すごい大きなテーマを与えられた気がしています。この思いをもっているのといないのでは違うと信じながらやっついこうと思っています。

降矢 私はずっと思っていて形にならないのですが、タブーも含めて社会的なメッセージのある絵本もかきたいと思っています。

・・・・・・・・・・・・・・・・

会期中、「ててん茶話会」も毎週のように開催されました。出品作家や手から手へ実行委員の方々が来館者と語り合うこの会、参加者によって、絵本の読み聞かせがあったり、原発についての議論が交わされたりと、毎回違う雰囲気で行われました。

5/26 (日)	昆野良美、広松由希子、降矢奈々
6/9 (日)	アンヴィル奈宝子、広松由希子、ふしはらのじこ、降矢奈々、降矢洋子
6/16 (日)	梶浦聖子、早川純子
6/23 (日)	児島なおみ、長野ヒデ子、浜田桂子
6/30 (日)	そのだえり、那須田淳
7/7 (日)	おくはらゆめ、村上康成
7/14 (日)	坂田季代子、山田真奈未
7/15 (月祝)	岡田千晶、藤本将、渡邊智子
7/27 (土)	木坂涼、野坂悦子

・・・・・・・・・・・・・・・・

また、来館した方々が自分の手型に書いたメッセージを、木の葉のように茂らせていく「みんなの手の木」も展示室内に設置されました。ここには会期中毎日、大人から子どもまで大変多くの方から被災地の方々に寄せる思いや原発への意見、未来への抱負などが寄せられました。



「手から手へ展」はちひろ美術館の会期終了後も日本各地を巡回し、絵本作家たちの思いを伝え続けていきます。(上島史子)

ひとこと ふたこと みこと



5月5日(日)
ちひろ展があるたびに足を運び、いつの間にか大好きな作家の一人となりました。20代に見た絵、30代に見た絵、そして40代に見た絵。同じ絵を何度も見ているけれど、それぞれ感じ方も違い、思いも変わり、これからも変わっていくであろうと思います。今日は初めて絵をみつめ、涙がポロポロと流れました。再び絵に触れることができたこと、生きていてよかったと思います。今日は娘と二人で来ました。また来られたらいいなと思います。(岡山県 岡崎和子)

【手から手へ展】

6月9日(日)
子どもが小さい頃読み聞かせていた絵本の作者たち。絵本が思い出され、そして3.11が思い出され

た。胸がいっぱいになり、なぜか涙が止まりません。小さな声、屈きました。私のなかで大きなエネルギーとなりました。今私ができること、もう一度考えたいと思います。(広島紀子)

6月11日(火)

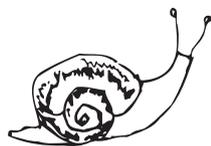
私が生まれたときからそばにあったちひろさんの絵。その絵を見に来たのですが、「手から手へ展」にも出会えました。3.11から私は止まったままです。無力さにおしつぶされてそのまま。何もできずにそのまま。でも「そのまま」ではいけない。動き出さないといけない。震災でたくさんの命が奪われたとき、私の息子も星になりました。今天国で不安そうにこちらを見下ろしているんじゃないかと思っています。より良くすることは不可

能だと思っています。現状維持も違う。だから新しい価値判断で、新しい世界をつくっていかないと。優しくてぬくもりがあって、小さく幸せな毎日を。ささやかに光る星のまたたきのように暮らしていきたいです。(群馬県 future)

6月11日(火)

今日この展示を見て、私もまた“何が大切なのか”をもう一度ゆっくり考え直す時間となりました。「つなみてんでんこ はしれ、上へ！」をベンチで読み、思わず当時を思い出して涙が出ましたが、展示してあるたくさんの作品、作家さんが「大丈夫、みんな同じ思いだよ。一緒に前に進もう」と言ってくれているようで、ふっと落ち着きました。ここに来て本当によかったです。(豊島区 なな子)

美術館 日記



5月18日(土) ☀
ちひろの庭展最終日。花柄の服特典の招待券プレゼントは、計806名に。次回展への来館のきっかけになれば、と期待がふくらむ。

5月30日(木) ☂
岐阜から、中学生4名が修学旅行中の職場体験に来館。限られた時間のなか、開館業務を中心に積極的に体験してくれた。「一年前、母が読んでいた雑誌に山田洋次さんと黒柳徹子さんの対談が掲載されていて、いわさきちひろを知り、興味を持ったので」と唯一の男子生徒。雑誌の読者層ではない若者にも波及していたことに、感激。

6月20日(木) ☁/☂
区立石神井小学校の3年生に水彩技法体験の出前授業。ぜひ美術館で「本物」の作品を鑑賞して、と保護者招待券をはじめて配布した。

地域子どもたちに身近な美術館になりたい、と日々試行錯誤中。

6月22日(土)

「手から手へ展」出品作家のワウター・ヴァン・レークさんがオランダより来日。通訳の野坂悦子さん、小学生対象のWS「手と手でかこう」を開催した。絵本「ケープドリ はつめいのまき」にちなんで、一人ひとりが空想の機械を描いた。みんなの機械をつなぎあわせると、長〜いひとつの機械の完成！「日本の子どもたちはすばらしい！」とワウターさん。

6月23日(日)

「手から手へ展」関連イベント「ててん茶話会」の4回目。本日は、長野ヒデ子さんの「紙芝居」、浜田桂子さんの「読み聞かせ」、児島なおみさんの「おはなし」と盛りだくさんの会となり、延べ30~35名

が参加した。会期中に9回開催される茶話会、お迎えする作家が入れ替わるので、雰囲気もさまざまに変わる。熱心なファンも、ふらりと立ち寄られる方も……皆さんが、一期一会のひと時を楽しんだ。

6月29日(土)

各地で自主上映が続く「いわさきちひろ~27歳の旅立ち」。本日は、東久留米ドキュメンタリー映画祭(東京都)にて、2回にわたり上映。あわせて200名近くが鑑賞され、終盤には涙ぐむ方々も。実行委員会の真摯な取り組みが感じられる映画祭、各地でこのように上映されているのだと思うと、うれしい。

7月7日(日)

早くも梅雨が明け、猛暑に。作品の保存管理上、一定温度を保つ必要がある展示室は、まるで別世界。この涼しさをぜひシェアしたい。

窓

「井上ひさしさんの思い出ーちひろと日本国憲法」

竹迫祐子(公財)いわさきちひろ記念事業団事務局長

「ちひろさんは、加害の立場だったんですね。ようやくわかりました、ちひろさんがどうして、あんな絵を描きつづけられたのが…」作家の井上ひさしさんの言葉です。2009年6月22日、子どもの本九条の会・広島設立の集いで、いわさきちひろの絵と人生についての話を聴いてくださったこと。加害の立場だった人間がそれを見つめ、それを繰り返さないと決意した思いは本当に強い、とも言われました。

井上さんが、ちひろの絵とのコラボレーションでつくった「子どもにつたえる日本国憲法」(講談社 2006年)。「日本国憲法が

持っている気高くて、とても現実的な理想主義と彼女の絵がなぜかぴったりだった」と、井上さんは語っています。

戦後、日本は加害への反省と被害の痛みをもって、すべて人間は生まれながらに自由平等で、幸福を追求する権利をもつという思想=天賦人權説に基づく今の憲法を生みました。天皇でなく国民が国を治め(主権在民)、その自由=権利を可能な限り認め(国民の基本的人權)、国際紛争の解決に武力は使わない(平和主義)という3本柱を持つ日本国憲法は人類の究極の英知です。

ちひろは、自らの戦争体験を経て切実な

願いを、「世界中のこども みんなに平和としあわせを」という言葉に凝縮させました。その言葉は、いかなる子どもも例外なく平和で文化的な環境で、幸せになる権利を持っていることを示しています。日本ではそれを憲法が保障しています。恒久平和(9条)、幸福追求の権利(13条)をはじめ、思想の自由、信教の自由、表現の自由、学問の自由、そして、健康で文化的な最低限度の生活を送る権利等が、「子どものしあわせと平和」を保障しています。多くの犠牲を払って得た英知を、私たちは大切にしていきたいと思います。

●次回展示予定 2013年10月30日(水)～2014年1月31日(金)

ちひろと初山滋 -永遠のコドモ-

いわさきちひろが子ども時代に「コドモノクニ」で見て以来その絵に憧れ、画家として活躍をはじめた後も尊敬し続けた画家・初山滋。初山の没後40年を機に開催する本展では、絵筆を通して心のなかの“子ども”を解放することのできたふたりの画家、ちひろと初山滋の作品を紹介します。
また、初山滋は木版画の制作にも力を注いでいました。自画自刻自摺木版でつくられた大作や絵本『もず』などを展示します。



赤い毛糸帽の女の子
『ゆきのひのたんじょうび』(至光社)より 1972年



初山滋 金平糖 1950年代

〈同時展示〉初山滋の木版画

ちひろ美術館・東京イベント予定

<http://www.chihiro.jp/>

各イベントの予約・お問合わせは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。イベント参加費のほか、別途入館料が必要です(高校生以下は無料)。
TEL. 03-3995-0612 E-mail chihiro@gol.com

●大塚敦子講演会「ともに生きるということ」

生と死、人と動物の絆をみつめるフォトジャーナリストが、東日本大震災の復興や、自作に込めた想いを語ります。

○日 時：8月10日(土) 15:00～16:30

要申し込み、7月10日(水)受付開始

○講 師：大塚敦子(フォトジャーナリスト)

○定 員：60名 ○参加費：1000円

●ちひろの水彩技法体験ワークショップ
「にじみでうちわをつくろう」

ちひろの水彩技法をわかりやすく解説し、実際に透明水彩で、ちひろが用いた技法を体験する人気ワークショップ。今回は、オリジナルのうちわをつくります。



○日 時：8月17日(土)・

18日(日)

①13:30～14:30 / ②15:00～16:00

要申し込み、7月17日(水)受付開始

○講 師：ちひろ美術館職員

○対 象：5歳～大人

○定 員：各回25名

○参加費：500円 *所要時間60分

●子どもギャラリートーク

○日 時：8月24日(土) 14:00～14:40

要申し込み、7月24日(水)受付開始

○定 員：15名 ○対 象：小学生 ○参加費：無料

●わらべうたあそび

声を出して歌ったり、体を動かしたりしながら、親子で楽しく参加ができます。

○日 時：9月7日(土) 11:00～11:40

○講 師：服部雅子

○定 員：15組30名 要申し込み、8月7日(水)受付開始

○対 象：0～2歳までの乳幼児と保護者 ○参加費：無料

●お盆期間の開館情報

2013年8月10日(土)～20日(火)は無休、18:00まで延長して開館いたします(最終入館17:30)。

●ちひろ美術館開館記念日 たてもの探検ツアー

ちひろ美術館の建物は、建築家・内藤廣の設計によるものです。建築の工夫を紹介しながら、ふだん見られないところまでご案内します。

○日 時：9月10日(火) 14:00～14:40

要申し込み、8月10日(土)受付開始

○定 員：20名 ○参加費：無料

●「ずっと長さんとともに」関連イベント

対談 谷川俊太郎×松本猛「長新太の子どもの本」

長新太が手がけた子どもの本の魅力を、交流のあった二人が語り合います。

○日 時：9月14日(土) 17:30～19:00

要申し込み、8月14日(水)受付開始

○講 師：谷川俊太郎(詩人)、
松本猛(ちひろ美術館常任顧問、絵本学会会長)

○定 員：80名 ○参加費：1000円

●ちひろ・絵本づくりの現場 スライドトーク

○日 時：9月22日(日) 14:00～15:00

要申し込み、8月22日(木)受付開始

○講 師：ちひろ美術館学芸員

○定 員：60名 ○参加費：無料

●〈他館での展示〉ピエゾグラフによるいわさきちひろ展
子どもたちへのまなざし

主催：丸亀市立資料館

子どもたちを何よりも愛しい存在として、やさしいまなざしで見守りたいいわさきちひろ。そこには平和を愛し、世界中の子どもたちが幸福に暮らせるようにと、祈りにも近い心で描き続けた画家の信念がありました。本展では、ピエゾグラフ作品約50点を展示するほか、講演会、水彩技法ワークショップなども開催します。

○会 期：2013年7月27日(土)～9月1日(日)

○会 場：丸亀市立資料館 ○休館日：月曜日

○開館時間：9:30～16:30 ○入館料：無料

*イベント・展示についてのお問い合わせは、丸亀市立資料館へ。

TEL. 0877-22-5366

●松本猛ギャラリートーク

10月6日(日) 14:00～ *参加自由

●ギャラリートーク

毎月第1・3土曜日 14:00～ *参加自由

●えほんのじかん

毎月第2・4土曜日

11:00～ *参加自由

CONTENTS

〈展示紹介〉ちひろ・絵本づくりの現場…②③

〈企画展〉ずっと長さんとともに -長新太が描いた子どもの本-…④⑤

〈活動報告〉手から手へ展関連イベント報告…⑥ ひとつことふたことみこと／美術館日記／窓「井上ひささんの思い出ーちひろと日本国憲法」…⑦

美術館だより No.182 発行2013年8月7日

ちひろ美術館・東京